

《いのち》

人の身体は約六十兆個の細胞からできていると言われています。その六十兆の細胞は、古くなつたものから日々剥落していきます。垢や糞尿となつて体外に排泄されるのです。一方、毎日摂取する栄養素からは新しい細胞が作りだされます。つまり、新陳代謝です。

さて、このような過程を繰り返して、人間の細胞の新陳代謝は、約七年ほどで一サイクルを終えるそうです。そうすると、一秒あたり三十二万個の細胞が生き死にをしている勘定になります。ということは、一瞬前の自分と今このときの自分とは、細胞という微細な物質のレベルでは、同じ自分ではないと言えます。人間の老化ということとは、細胞の新陳代謝が鈍化することによっていのでしょう。

しかし現実のレベルとしては、昔の自分と今の自分は同じ自分です。シワが増え、体力が衰え、記憶が悪くなることはあつても、自分という存在が、別の存在に変わるわけではありません。

これは、考えて見ればとても不思議なことですが、物質レベルでは刻々と変化していても、私はずっと私なのです。では過去の自分と、今現在の自分とを繋ぎ止めているもの、それは何でしょうか？

私は、それが「いのち」に他ならないと思うのです。この「いのち」とは、物質と時間の接点にいて、それを繋いでいるものです。だからもちろん、物質と時間、どちらをおろそかにしても、「いのち」は消滅してしまつたのです。したがって、細胞の新陳代謝を活性化するための「からだ」への気配りと同時に、過去の自分を振り返り、これからの自分を見つめる努力、つまり「時間」への配慮が大切になつてきます。常に「いのち」を生き活きと働かせて、さわやかに生きていきたいものですね。
(青山社素材集より)

本年3月庫裡を増築完成いたしました。
(平成21年5月22日撮影)



会 釈「えしゃく」

「和会通釈」の略で「会通」とも言われているが、そもそもは、仏教経典等を解釈することを指す言葉であるが、人間関係をスムーズにするには、お互いの気持ちの通じ合いが大切で「無財の七施」としてもおしえががあります。

無財の七施とは、捨身施、心慮施、和願施、慈眼施、愛語施、房舎施、床座施の七つをいう。

仏教が生んだ日本語



空海の言葉 シリーズ

くわんご
刻鏤、用に随つて刀を改む

彫刻家は、荒削りから仕上げまで、その時々用途に応じて、彫刻刀を使い分ける。

仏像を彫刻する場合となると、大小さまざま、数十本の彫刻刀が必要です。この刀のつかい方次第で、できあがる仏さまの格が決まるのです。

平安時代から鎌倉時代にかけて、多くの仏師が仏像を彫りました。運慶とか湛慶といった特上の仏師が彫つた仏像は、いまでは国宝になっています。仏師ばかりでなく、当時はお坊さんも彫刻刀を握りました。弘法さんも大いに仏像を彫られたようです。

弘法さんは、彫刻の手を休めながら、「用途に応じて刀をつかい分けるのは、人をつかうのと同じことだなあ」などと、考えられたでしょう！。